

の人に朗らかな笑顔を見せてあげましょう。もし私の話をお友だち同志、あるいは、ご家族揃って聴いてくださった方がありましたら、今、どうぞ静かに顔を見あって、ほおえみかわしてください。許しと愛情のしるしとして。

許すことによって、愛することによって、皆様のいのちが、祝福で満たされますように、と祈ります。

では、皆様、おやすみなさい。

## 第二話 高めあういのち

昔、ギリシャにひとりの若い詩人がおりました。美しい数篇の詩で、世人がようやくその詩人の名を認め始めたころになって、どういうわけか、フト靈感が、詩どころが停滞してしまったのです。今でいうスランプに陥ったのでした。高らかに歌い上げたい欲望だけがあって、その歌を乗せて飛ばせる詩心<sup>ししん</sup>が内から湧き上がって来ないのです。青年は悩み、あせり、苦しみました。その時、ひとりの少女が青年の前に現われて来るのです。青年はその少女を愛しました。その少女の清浄無垢な面影が青年の心を捉えたのです。そのとき、ぼつ然として詩情が湧いて来ました。その少女を愛し、その少女からも愛されていると考えただけで、くめどもくめども尽きることはない靈感が、こんこんと湧き起こって来て、青年は、調子の高いすばらしい詩<sup>うた</sup>を次から次へと発表して行ったということです。少女の名はエゲリアといったのでしたが、それ以来、人々はこの少女のエゲリアという名前を、固有名詞ではなく一般名詞として使うようになり、だれかがある少女を愛し、また愛されることによって、靈感を得、高められて行くという、そういう愛人の名



をエゲリアと呼ぶようになりました。

この話は、友情というものの、なかでも、異性同志が互いに異性を意識して愛しあう友情、すなわち恋愛というものの正しい姿を美しく描き出していると思われまふ。

友情というものは、ただの愛情と異なっていて、それはふたりの人間、たとえば甲と乙とが、相互の愛情を意識して愛しあうという、相互愛の中に生まれて来るものなのです。ですから友情には甲と乙、ふたりの人間が互いに結ばれ合う絆とでも申しましようか、一本の「ひも」ができるわけですから、そのひも、その絆には、高尚なものから下等なものまで、いろいろな種類があつて、その種類、その性質によって、友情の種類や性質もまた、変わつて来るものなのです。

たとえば、よく監獄で結ばれた友情などということがありますが、罪を犯して獄舎にいる間に、同じ獄舎の仲間の徹底的な悪人振りにぞっこんほれ込んで、娑婆に出てからもふたりはコンビになつて悪事を働き続けるというようなことが間々ありましよう。これなどは、結ばれた「ひも」が「悪そのもの」なのであつて、もちろん、そういう友情が、愛などみじんもない、ただ互いに利用しあうだけの、偽りの友情にはかならずぬことは言うまでもありません。

恋愛の場合にも、ほとんどそれに近いものがあるようですね。ただ、「からだ」だけの魅力、

「からだ」の与えあふ欲情の快楽だけで結ばれているもの、その絆は、愛情ではなくて欲情と言つた方がよいもので、そういう友情ならば、そこら辺の野ら犬の間にも見受けられます。

今夜の私の話を聞いてくださっている方々の中に、結婚前のお嬢さんたちがいられるでしょうか。もし、いらしたら、よく聞いていただきたいのです。ある青年が、いつかあなたの耳に愛の告白をささやくことがあつたなら、その愛に答える前に、一度よく考え、正直に自分自身に問いただしてみてください。「なぜ、彼は私を愛するのだろうか？ 私の何が彼の心を引きつけているのだろうか？」と。そして、もしも、残念なことに、それが、ただあなたの美ぼうと、あなたの均勢のとれた若さの美しさだけなのだと答えねばならなかったとしたら、その愛情に深入りしてはいけません。また、たとえ、どのような美しい言葉をささやかれようと、交際し始めて間もなく、あなたのすべてを求めてくるような青年の愛の言葉を信じてはいけません。ふたりの間に、今、結ばれようとする友情の絆は、ただ、からだの与えるただれた快楽以外の何ものでもないからです。もちろん、人間が人間を愛するのですから、その愛の対象の中には、「からだも」含まれています。私はあえて「からだも」と言います。すなわち、「からだだけ」ではないのです。「からだ」だけの絆というものが、どんなにはかなくもろいものかということ、あなたの方のたくさんの先輩たちが知り過ぎるほど、知っています。「からだ」だけの魅



力が一体どれくらい続くとお思いですか？ もしも、あなたが、そういう青年の愛情を信じて、あなたのすべてを与え尽くし、やがて飽きられ、捨てられるとき……しかも「からだ」だけの魅力で異性の愛を求めたのが、あなた自身であったとしたら……その愛情の破たん悲運に泣く悲しみの涙は、だれの責任でもない、あなた自身の責任になるのですよ。

ところで、もしも、あなたが、本当の人間としての、人間らしい誇りをあなたの心の中に培うなら、すなわち、あなたの目を内側に向けて、内面的な精神の美しさを内に蔵するなら……たとえば、高い教養を持ちながら、それを謙虚に包むことを忘れず、深い大きな愛情を内にたくわえながら、それにおぼれぬだけの理知にも生き、女らしいしとかさの内に、強じんな信念を宿し、特に清浄と純潔との価値を知る魂……そういう内面の輝きは、それを内に隠そうとすればするほど、おのずから外に溢れ出て来るものなのです。全人格の輝きが光を放つのです。

ことに、純潔の美しさというものは、それがからだのことだと思っている人が多いようですが、そうではありません。実は、それは精神的な美しさなのです。だれでもが持っている本能としてのからだの欲望を、それが許される時まで……というところ、つまり、結婚生活という確固たる基盤ができて、愛の結晶としての子供を生みかつ育てる権利と資格とができるまでは、より強く、より高い精神的な力でもって、その欲望を制御し、それを快楽として味わわないということ、もち

ろん、それには、自分自身の欲情との不断の戦いが必要でしょうが、本能の正しい理解と強い意志とで己が肉体との戦いを続けて行くとき、肉体に対する精神力の勝利の栄光が外に溢れ出て来るその内面の輝きこそが、ふくいくたる処女の純潔の香りであり、また、童貞なる青年のけなげな「りりしさ」なのであります。そうなったなら、実は外面の美ぼう、容姿、姿態の均勢などは、どうでもよくなるのです。

そして、そういうあなたの内面の輝きが目につかぬほどに、「からだ」のことにしか興味のない青年ならば、あなたの愛の対象としてはあまりにも値打ちのないものと言わねばなりません。けれど、もし、あなたのその人格の美に心打たれる青年があったとすれば、その青年は自分もまた、その心の中に、あなたの内面の輝きによって高鳴ることを知っている美しい心の琴線を持っているものと言えましょう。

彼の魂は、あなたを愛することに大きな誇りを感じると共に、その愛に値するものたろうとして、彼もまた己が心を清め高めようと努力するでしょう。あなたは、また、そのけなげな青年の愛に答え得ようとして、あなた自身を深めて行くでしょう。

かくて、愛しあうとは、お互いがお互いを高め、清め、育くみあって行く生命なのです。ふたりの若さや、からだの容姿はやがて衰えて行きましょう。けれど育くみあって行く魂の輝きは、



若さや美ほうとは何の關係もなく、どこまでも、ふたりのいのちを大きくふくらませ、満たし続けて行くことでしょう。そのような愛情の世界が、あり得ることを……いや、あなた方自身が、そういう世界を生み出して行かねばならないのだということを信じていただきたいのです。

十九世紀末のフランスの文壇に異彩を放ったレオン・ブローという作家がありました。彼は青年時代文学にこつて、せっかく得た建築助手の職業を投げ捨て、父親の怒りと嘆きをよそに、頹廢的な生活に陥込んで行きました。それからというもの、およそ二十年の間、彼の生活は、浪費と恋愛沙汰のうちに続いて行きますが、ついに彼が四十才を越えたある日のこと、友人の葬式で、ジャンヌというひとりの女性に出会いました。彼女こそ、ブロー自身の言葉を借りると「今までだれもが逃れることのできなかった非常に大きな危険から、私を救うために、私の前におかれたひとりの女性」であつたのです。ふたりはヒシと愛しあい、やがて結婚に結ばれますが、その結婚までの恋愛の一年間、ブローがジャンヌに書き送った手紙が、後に「フィアンセへの手紙」として公開されました。

きょうは、もうあまり時間もありませんので、お別れの言葉のかわりに、その一節を朗読してみましよう。ブローはこんなことを書いています。

『愛するジャンヌよ。

僕たちはどんなにお互いの心の中に深く入っていることだろうね。

僕たちは、一つの愛の中で、一緒に祈り、一緒に神の言葉を学ぼうよ。

神の愛と、君の愛とに支えられて、何か偉大な仕事を成し遂げられそうな気がする。そうだ、すばらしいことがやって来るようだよ。そして僕も、もし、君を光の中に歩ませることができ

るなら、そのかわりに僕自身の幸福の全部を断念しても悔いがないと思うよ。

ジャンヌ！僕は君を大きな愛で包む。では、さようなら

君のレオン・ブローより』

×

×

×

で、私も、皆様を大きな愛で包みつつ、皆様に、さようならと申しましよう。  
では、皆様、夜もふけました。静かにやすみなさい。